

平成二十九年

報恩講のご案内

場所 ケアハウス和 三宝の間

一、逮夜法要 十一月十六日（木）

勤行 午後二時から三時まで

伽陀・表白・正信偈・念佛・和讃・回向

御文

一、日中法要 十一月十七日（金）

勤行 午前十一時から

伽陀・表白・正信偈・念佛・和讃・回向

お齋 入居者のみ（昼食） 正午から

勤行 午後一時三十分から

嘆佛偈・念佛・和讃・回向

法話 午後三時まで（途中に十五分間の休憩あり）

講師 百々海真師（東京港区・了善寺住職）

報恩講の案内状に添える言葉

私共人間は恩波おんぱの上にただよっている小舟こぶねのようなものである。

前も恩、後ろも恩、右も恩、左も恩、過去も恩、未来も恩、私がこの世いに居るといふことの一切が御恩である。この御恩は返しても返しても加わってくる。私共の生活は恩をうくる生活であると同時に恩に報ゆる生活である。この事を教えて下さったのが親鸞しんらん聖人しょうにんである。聖人の教えがなかったら私は恩の中にいながら恩を知らないでいたことである。これによって思うに聖人が私の受けている御恩ごおんの根本こんぽんである。

一年三百六十五日、一日として報恩の日でない日はない。毎日が報恩講である。その報恩講の最も根本的なものが親鸞聖人の御恩に対する報恩講である。聖人の報恩講を営むことによって報恩の生活が明らかになるのである。毎年十一月、聖人の報恩講に逢あう毎ごとに御恩の中に育っている自分を明らかにして頂くのである。故ゆえに私は毎年の報恩講が生活刷新せいかっさうしんの根源であると信じて居る。毎年報恩講を営いむことによつて生活のよろこびと力とを鼓舞こぶせられることである。

昭和二十一年の報恩講も近づいて来た。私は知友同行ちゆうどうぎようと共にこの報恩講を迎むかうるのに胸をおどらしておる。報恩講に際して聖人に捧こぐる最上のお供物くもつは、聖人のお客人を迎むかえる事である。私は聖人のお客人として私の営む報恩講の御座おざに一人でも沢山たくさんの知友同行ちゆうどうぎようの集まられる事を望んでいるのである。聖人の最も喜ばせられるお客人として、皆さんを御招待する光栄を感ずるのである。

昭和二十一年十一月

明達寺住職

あけがらす
暁 烏 敏
はや